

靴ひものほつれたままで地に長き光の中を走りゆく君

茨城県立結城第二高等学校 三年

石橋 英里香

ストローを噛みたる生徒会長のマニキュアの黒てらてら光る

星野高等学校

二年

村田 陽代莉

妹の名前の長き光線を受けて苦しむ悪役の我

星野高等学校

二年

延島 永都美

平凡を非凡に変へる君の声響く家屋に育つサボテン

星野高等学校

一年

枡木 勇芽

黒髪の家出少女の鞆には顔の歪んだこけしがひとつ

星野高等学校

二年

東風平 梨緒

幸福と絶望ばかり摘み取つてただの家鴨となりゆく僕ら

星野高等学校

二年

宗村 都央

春風の育む花の芽の光電波塔には未だ届かず

星野高等学校

一年

大谷 友也

保育所のおもちやの箱のやうな場で夢だけ抱へ死んでゆきたし

星野高等学校

二年

田中 望結

その笑みを君は誰かに向けていた僕は曙光を見ないふりした

渋谷教育学園渋谷高等学校 二年 五十嵐 ニコ

ばあちゃんが私を守るようにして家庭訪問受けてくれた日

渋谷教育学園渋谷高等学校 二年 鈴木 深優

「月だって照らされ光るわけだから」後が続かぬ慰め言葉

神奈川県立横浜緑ヶ丘高等学校 一年 亀山 結

道ばたに黒いキツネが顔を出す光がつくる一つの命

神奈川県立光陵高等学校 一年 野本 優菜

私かて家族に内緒で泣いてるよ絡まったままイヤホンつけて

神奈川県立光陵高等学校 一年 小野 愛加

折り畳み傘のしずくを払ったの育てた嘘を眺めたままで

神奈川県立光陵高等学校 一年 藤崎 真子

日光に当たらなくても人は育つもやし炒めはおいしけりゃいい

神奈川県立光陵高等学校 二年 松尾 百華

一発の打ち上げ花火の一粒の光の消えていくまでを見る

鎌倉女学院高等学校 二年 須藤 遥

家路つく港からの「ド」二秒間現在時刻午後六時半

鎌倉女学院高等学校

二年

澤 ありさ

青知らぬ雨が一つの影に落つ帰り道にはあかねの光

富山県立富山中部高等学校

一年

若木 美来

小学生体育のかけ声響く午後わたしのシャー芯ぼっきり折れた

富山県立富山中部高等学校

一年

井川 咲恵

大切な思い出ばかり光るけど痛みもあって今の僕です

愛知県立豊橋西高等学校

一年

中村 颯汰

夕虹の光へ届かせるようにサビ前のソプラノはハミング

高田高等学校

二年

網谷 菜桜

もし明日家に兎が来たらなど考えながら鳴門を食べる

高田高等学校

一年

岸野 大輝

知育菓子なんて呼ばれて僕たちを正しく導くために売られて

高田高等学校

二年

前川 陽香

目をつぶってしまうような日の光浴びて向上未来創造

神戸市立六甲アイランド高等学校

二年

永井 優渚

君と見た光って落ちてゆく花火あの夏のこと忘れられない

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

谷口 あい

帰り道光が差しうつむくとあなたの影がやけにきれいだ

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

澤口 杏菜

目の前で光り輝く背番号クシャクシャになる放送原稿

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

高木 みはる

舞台上サスの光に照らされて一気に高まる私の鼓動

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

秋山 楓華

充電が溜まったままのペンライト光るべき場所一度もなかった

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

中山 梨沙

おでました空をつらぬく稲光夏の悪魔に何故かひかれる

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

山本 莉来

部活後のバスに揺られる長い旅もうすぐ着くよ月光とともに

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

松本 陸杜

あみを手に光沢探す山の中青々とした小二の真夏

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

竹本 柊香

光さす夏夜の空に一等星あの子を照らすスポットライト

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

山本 美空

真っ暗な画面が光り君の名前嬉しいはずで少し寂しい

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

谷岡 萌衣

前歩く君が突然ふりかえる止まった私を月光てらす

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

中井 琳月

夜の海一人歩く砂浜で僕を照らす灯台の光

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

柳川 滉介

夜に降る雨粒たちはきらきらと月に照らされ光り輝く

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

福政 有紀

灯り消し自室で舐める炭酸水月の光でお酒に変わる

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

林田 和真

舞台上緊張しつつ指揮者待つ輝く照明の光浴びて

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

竹内 志穂

コロナ禍でうれしいはずの休校がこんなにさびしい一人の家で

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

武内 志穂

午後八時万華鏡の家並みが海へと向かう車窓に流れる

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

上野 大輔

家の隅枯れてはじけたミニトマト地に落ちた夢拾い集めて

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

河本 陽向

ただいまと疲れて家の戸を開けた小さくまるい影ひとつある

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

森本 彩月

かしの木におなかをすかせてピーピーと歌を奏でる小さなお家

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

川原 妃麻里

この家の空気が止まる今日の夜に君の寝息に耳をすませば

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

田中 駿之介

家の窓切り取られた青あの雲に乗ってどこまでも遠くへ

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

光浪 梨央

家にいるただそれだけで人助けこんな生活終わってほしい

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

太田垣 爽来

切った髪新しい服塗った爪歩くランウェイ家の中だけ

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

古市 茉穂

大阪のきょうだいいない兄の家新幹線が代わりに騒ぐ

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

橋崎 星空

家までの道のり遠く感じてるやっぱり雨の日は嫌いだ

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

菅 真奈美

ふと見ればあなたの家が目に写るオレンジ色の空と一緒に

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

神原 悠佑

育つとは大きくなることでもあるがもう戻れなくなることである

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

高田 暖大

ベランダにトマト育てるこの夏のあなたも私もまだまだ青い

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

今村 花

知りたいなおいしいスイカの育て方祖父の姿を追いかけている

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

田中 晴登

モノクロの空き家に生ゆる真緑のアロエはたく育ちすぎている

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

砂田 達己

アサガオと我に指さす幼児の笑顔まぶしき生育日記

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

山根 大樹

思い出す押入れの奥のさらに奥一生懸命育てていた子

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

本庄 由実

コート隅勝手に育つ雑草と伸びない私を比べてみては

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

瀬村 明里

堂々と育つ黄色の向日葵に僕はまだまだ届かなくて

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

竹部 栞桜

沈黙を育てて歩く帰り道抱えきれずにお茶を飲み干す

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

川瀬 章太郎

公園に育ち盛りのまばらな影日が暮れる頃みんな似ていた

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

井上 樹

花冷えに靴下ぬぎて体育館足のこごえと針のかたむき

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

小林 心

夕方にブランコをこぐ私の背ばかりが育ちのこる童心

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

福田 友梨

木に測った昔の背丈は今のおへそ育てば僕は古くなるかな

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

河井 峻馬

黙々とパンを育てるイースト菌お前はえらいな文句も言わずに

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

林田 和真

空高く育つ向日葵すくすくと「もうすぐ抜くね」と背のびをしてみる

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

嶋田 光紗

食卓で嫌う野菜も畑では立派に育てと笑う妹

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

橋崎 星空

目を閉じて見上げた空はまぶしくて私の中で何かが育った

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

森下 心

バスに乗る時間が長くなるたびに周りの木々が大きく育つ

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

森本 有咲

体育祭君が光って見えるのは日に照らされた汗のせいかな

鳥取県立鳥取東高等学校

二年

小谷 明日香

雨の日の学校帰り歩く道光り輝く木の葉のしづく

鳥取県立鳥取湖陵高等学校

一年

横川 美紅

海海月岬の上から見下ろして数多の光が君と重なる

鳥取県立鳥取湖陵高等学校

三年

荻野 翔悟

梅雨明けの陽に照らされる水たまり光反射し覗けぬ世界

鳥取県立鳥取湖陵高等学校 三年

澤 亮兵

幸運を使い果たしてゆくやつだ銀杏並木のかがやく家路

鳥取県立鳥取湖陵高等学校 二年

小嶋 杏菜

放課後の自転車小屋にさす夕日二人の背中育つ影法師

鳥取県立鳥取湖陵高等学校 三年

宮井 真桜

カーテンを毎朝母が開け放つ光の帯が奥まで照らす

鳥取県立境高等学校 一年

邊土 壱功

自粛中家事の合間に舞う神楽長々し夜をひとり楽しむ

鳥根県立平田高等学校 二年

野津 歌純

子つばめの風に震える弱き羽朝の光の中へ翔けゆく

岡山県立岡山朝日高等学校 一年

小坂田 華

個性という光与えよ白魔術真夜中に噛む味消えたガム

岡山県立岡山朝日高等学校 二年

金子 遼耶

空間と時間を君が照らすとき蛍光灯の残り灯の僕

岡山県立岡山朝日高等学校 二年

赤松 音於

夕さりの家の灯と笑い声汚れちまった手を握りこむ

岡山県立岡山朝日高等学校 二年 富井 彩夏

結局はその善悪も主観でしょと諸子百家を鼻で笑った

岡山県立岡山朝日高等学校 二年 赤松 音於

澱のごと湧き返るもの胸にありドヴォルザークの「家路」の調べ

岡山県立岡山朝日高等学校 二年 金子 遼耶

朝顔のぐんぐん育ち弟は悔しまぎれに「ぼくはジャックだ！」

岡山県立岡山朝日高等学校 一年 福田 悠暁

漠とした体育館の冷たさよ放課後の熱と共に暮れゆく

岡山県立岡山朝日高等学校 一年 西浦 和真

向日葵を育て忘れたあの夏が怠惰の底の僕を動かす

岡山県立岡山朝日高等学校 二年 赤松 音於

一軒家もマンションの部屋も家として寂しさをくむ明かりが灯る

山口県立光高等学校 二年 石田 晃大

果てしない言葉の海でひっそりと光った文字を釣り上げている

福岡県立城南高等学校 二年 中山 公介

仕事着の父が育てた赤トマトほほにニキビの僕に似ている

福岡県立城南高等学校

二年

馬場 竜也

天窓にはりついている守宮の手家によりそう北極星ひとつ

宮崎県立宮崎商業高等学校

一年

後藤 みずき